神聖かまってちゃんとカフカ・フランツ ―――伝説の

ラブ・レター

　なぜ躁鬱になるのか。ある政治家は「心が弱いからだ」と発言した。しかし、精神科医の見解はまったく違う。「責任感が強いから」という。けっして心の弱さではないのだ。
　たしかに、政治家に躁鬱がいないのかと考えてみると彼らには責任感がなさそうだ。

　九〇年代にメロコア・パンクというシーンを作り上げ、活躍したバンド「ハイスタンダード」は二〇〇〇年の活動休止後、三人ともべつべつの理由だがノイローゼになったという。同じく、九〇年代にヴィジュアル系のサウンド形式と精神を決定づけ、活躍したバンド「ルナシー」の楽曲製作の中核のひとりであるベーシスト「Ｊ」は、アルバムがオリコン一位になったにも関わらず思い描いていたサウンドと解離していたためノイローゼになった。
　バンドのノイローゼ話は数知れず。躁鬱エピソードをかき集め、「恋に悩んでるあなたに送る一〇〇のことば」というテキトーなタイトルで本を売り出せば、そこそこ売れるのではないだろうか。
　これを読んでいるあなたもノイローゼ気味のはずだ。ノイローゼでなければここに辿りつかない。しかし、きみは正しい。

内閣府の平成二十三年の「あなたはいままで自殺したいと思ったことがあるか・考えたことがあるか」という調査をみてみると、二十代は約二十八パーセントがいままで自殺を考えたことがあるという。
　わたしとしてはこの数字に驚きだ。少なすぎるぞ。約七割がいままでの人生で一度も自殺したいと考えたことがないとは。いままで死にたいと思ったことがない二十代が七割もいたんじゃ、われわれが生きづらいのも当たり前である。彼らはいったいどんな学校生活をして、どんな精神構造なのだろう。不思議だ。
　いままで生きてきて死にたいと思ったことが一度もないという人間をわたしは信用できない。そんな人がわれわれに「死ぬな」「生きろ」と無自覚に言っていることに恐怖する。

『変身』の作者として知られるカフカ・フランツはとても後ろ向きな人間だった。たとえば、

“将来にむかって歩くことは、僕にはできません。
将来にむかって駆け込むことは、将来に向かってころげ込むことは、将来にむかってつまずくことは、これはできます。
一番うまくできるのは、倒れたままでいることです。”

これは、カフカが書いた有名なラブレターだ。ネガティブながらユーモアを感じる。こういう人間の方が断然信用できる。
これをみると、死にたいと考えたこともない人間が「生きるってすばらしい」といっていることはなんて残念なんだろうと思う。
「ザ・クロマニヨンズ」の真島昌利は、「死というのはそもそも生の正反対なんじゃなくて、延長線上にあるもの。死の匂いがしないと生のダイナミズムも出ない」と言っている。
死を考えることは生を考えることでもあるということだ。無自覚に生を語るより、死について考えてるわれわれの方がいくらかまともだ。

二〇一三年、神聖かまってちゃんはネットにある曲をアップする。『マイスリー全部ゆめ』だ。その楽曲ではこう語られる。

《今僕は最高に落ちこんでいます
それが分かる僕と１人きりで薬飲みたい

全てが嫌だ それだけさ／引き出しのハサミで　みんな殺して　なんまいだー
こんなかわいそうな僕の事を　これ以上苦しめるのはやめて
ごめんね僕は　僕って誰さ

正直に僕は生きれませんでした》

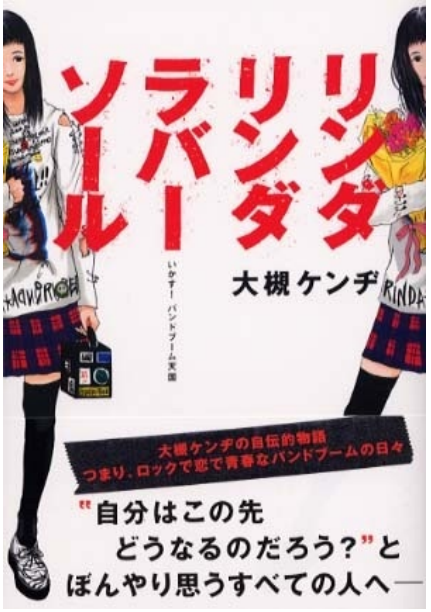
マイスリー全部ゆめ

彼らの楽曲のなかではなかなかめずらしいシンプルな構成の曲だった。それゆえ、言葉の威力は鋭さを増す（こういうこと言われるのの子は好きじゃなさそうだが）。とてもダウナーな歌詞だ。この曲を聴いて「かわいそうだね」「愚かしいことだね」と云ってしまえる人とは話をしたくない。

小説家の山内マリコは雑誌ユリイカのなかで「いまは明るいものや前向きなものを書くべきだっていう風潮があるけど、もともと小説っていうのはダウナーな人のためのもの」といっている。

これはロックにも共通ずる。表現を欲している人間は自分のなかの何かを能動的に探そうとしている者だ。現実の生活では満たされることがない。だから、表現を欲しているのだ。

ロックはダウナーな者のためのものだ。傷つきやすく、繊細で、責任感が強い、ビビり。そういう人間こそロックを趣向する。ロックはヤンキーのためでもなく、アッパーな気分にさせるためのオタクの道具でもない。ヤンキーでもオタクでもない、ましてやマジに自殺してしまう者のためでもなく、そこにすら入れない臆病者のためにあるのがロックである。



「働いてないからそんなことを考えるんだ！働け！」という意見を聞く。これは、たしかにそうだ。命のやりとりをしている紛争地域へ行ったとすると、死のことを考えている暇などない。結局、人は考える暇などあるから死を考えてしまう。

だからといって、すぐに自分を切り替えることはできない。答えがわかっていても、自分のなかでそこに至る思考のプロセスをたどっていないと人は変化しない。なぜなら、孔子の名言集やブッタの言葉を読んでいれば、人は同じだけの知性と教養を得ることになるはずが、じっさいはそうなっていない。

人は学校の教科書で道徳心を学び、週刊少年ジャンプで努力と友情の大切さを学ぶ。なのに日本では毎年自殺者が三万人を超えるという。

答えに至るプロセスをみせたり、あるいは擬似体験させるのがマンガであり映画であり、ロックである。

暇をいっさい許さず、働くことを絶対正義とすることは人間の文明を否定することになる。考えることなくしては、人間はいっさいの情もない動物になってしまうからだ。暇から生まれた文化こそ、人間が他の動物とはちがうという証明であり、人間が人間たらしめているものである。

人間は立派なものではない。立派な人間はいるが、けっこう怠惰だ。そんなことをロックは云ってくれる。

神聖かまってちゃんはダウナーな人間たちに居場所を作った。自分は間違っていないと思えることによって人は生きづらさからすこし踏み出せる。彼らはそんな臆病者たちの隣にそっといる。ちょっと輝いている。うらやましくも思う。

過去ロックンロールを鳴らしてきたバンドたちが行ってきたことはそういうことだろう。臆病者にたいして「まちがってないよ」ということ。それを生きるか死ぬか己の全存在をかけて云う。出来そうだが実はなかなか出来ることでなはない。

神聖かまってちゃんはロックシーンでいま最も信用できるバンドだ。

うおお

神聖かまってちゃんとノイローゼ ーーー文学は本来ダウナーな人のためのもの

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ